



歌舞伎を見る客でにぎわう、江戸時代の芝居小屋を描いた浮世絵『大芝居繁栄之図』。歓声が聞こえてくるようだ  
(所蔵/東京都立中央図書館特別文庫室)

ンに変化してしまう。このような舞台機構を駆使する  
スペクタクルを18世紀から備えている演劇は珍しく、  
素晴らしい発想だと思います。

### 物語を楽しむ

歌舞伎の演目には、歴史劇、恋愛劇、コメディ、ホ  
ラーなど、ありとあらゆるストーリーのものがあ  
ります。その中でも日本人に最も愛されてきた物語は『  
仮名手本忠臣蔵』※8でしょう。主君を切腹に追い込ま  
れた家来たちが、大変な苦労を重ねた末に敵を殺して復  
讐を果たすという物語です。日本人は、復讐そのも  
のよりも、むしろ家来たちの苦労に深く共感するのだ  
と思います。復讐の計画を秘密のうちに進行させるた  
め、家来たちは常に本心を隠し、決して大望を明らか  
にしない。この「言いたくても言えない」という状況  
がドラマとして重要なのです。

また恋愛は歌舞伎の重要なテーマの一つですが、江  
戸時代には自由な恋愛は決して許されませんでした。  
それは身分・階層に基づいた社会制度を根底から動揺  
させることになるからです。つまり自由恋愛は犯罪だ  
ったわけです。だからこそ江戸の人びとは劇的な恋愛  
に憧れ、好んで歌舞伎の題材に取り上げられました。

そして、これは今まで指摘されなかったことですが、  
『義経千本桜-四ノ切』※9のように、動物が劇の主人公  
になるというのは、西洋の大人向けの演劇ではまず見  
られないことでしょう。歌舞伎より古く成立した狂言  
にも、『釣狐』※10のように動物が主人公になる演目  
があります。また動物が活躍する歌舞伎の多くは原作が

人形劇(人形浄瑠璃※11)であったために、動物の登  
場に違和感がなかったという事情もあります。

### 芸の継承を楽しむ

歌舞伎の劇場には、客席の間を通過して舞台へと続く  
「花道」※12があります。花道のそばの席に座ると、役  
者が登退場するたびに、その息遣いや匂いまでもが感  
じられます。また舞台という区切られた空間を超えた  
ところにも、役者と観客の間には、独特の親密さが存  
在します。歌舞伎の役者たちは、親から子へ、師匠か  
ら弟子へと何世代にもわたって芸を伝え、同時に役者  
としての名前も継承していきます。その継承の過程を、  
観客も興味深く見守り、容貌や声も含めて、芸が受け  
継がれていくことに楽しみを見いだすのです。

見る人の視点に応じて、多様で自由な楽しみ方を提  
供してくれる、歌舞伎とはそういう芸能です。🎭

#### 【注釈】

- ※1 「暫」 大げさな扮装のヒーローが大活躍。7頁参照
- ※2 隈取 赤や青の顔料などで筋を引く、歌舞伎独自の化粧法。17頁参照
- ※3 祇園祭の山車 京都市・八坂神社の祭礼で、「山鉦(やまぼこ)」と呼  
ばれる豪華に装飾された山車が市街を巡る
- ※4 兜 武士の頭部を守る武具。鉄や革などで作り、工芸的なものも多い
- ※5 『寿曾我対面』 新年を祝う儀式劇。6頁参照
- ※6 女形 歌舞伎の女性役、または女性役を演じる役者。歌舞伎では、男  
性が女の役を務める
- ※7 廻り舞台、せり 14、15頁参照
- ※8 『仮名手本忠臣蔵』 日本人が大好きな敵討ちの物語。10頁参照
- ※9 『義経千本桜-四ノ切』 狐親子の情愛を描く。11頁参照
- ※10 『釣狐』 人間に化けた狐が殺生をやめるよう獵師を説得するが、餌の誘  
惑に負け、わなにかかるという筋の狂言。歌舞伎の舞踊にも取り入れ  
られた
- ※11 人形浄瑠璃 弦楽器の一種・三味線の伴奏による語り(浄瑠璃)で、  
操り人形を演じさせる人形芝居
- ※12 花道 15頁参照